東洋大学史ブックレット　7

井上円了の全国巡講

―旅する創立者　国内編―

白川部　達夫

東洋大学
TOYO UNIVERSITY

東洋大学史ブックレット　7

井上円了の全国巡講

―旅する創立者　国内編―

白川部 達夫

目次

一　はじめに　1
二　最初の講演旅行　4
三　講演旅行の日数・地域・内容　9
四　講演旅行の規則と修身教会・国民道徳普及会　16
五　旅行道具と旅の様子　24
六　おわりに　33

一　はじめに

井上円了（以下、円了と略す）は安政五年（一八五八）越後国三島郡浦村の慈光寺住職の長男として生まれました。一〇歳で明治維新を迎え、明治一四年（一八八一）、二三歳で東京大学文学部哲学科に入学し、明治一八年（一八八五）に同大学を卒業しました。物心ついた時期に戊辰戦争が、青春の多感な時期に西南戦争、自由民権運動が起きるなど、日本の急激な近代化にふれながら人生を歩み始めたのでした。

国家制度は明治維新の変革を担った前の世代の人びとが整えました。しかし学芸や文化、企業など市民社会を構成する諸要素の近代化はまだ手をつけられないまま残さ

れていました。円了に限らず、大学で西洋的知識を学んだ多くの若いエリートたちが、この分野に活動の場をもとめて展開していきました。自分たちで学会を新しく創り、文学を興し、絵画を描いて、近代文化の基礎を開拓したり、企業を興したりしていきました。井上円了の人生も、こうした時代の雰囲気のなかで形作られたものといえます。

円了は、大学を卒業してから就職を断り、教育者としての道を歩み始めます。その目標は学校を創り哲学を普及させることでした。明治二〇年（一八八七）に円了は、「哲学館開設の旨趣」を発表して学校創設に乗り出しました。この旨趣に賛同して二八〇名の人びとが寄付を寄せてくれました。後に哲学館は、これらの人びとが創ったのだと円了は回想しています。

しかし開設当初は、まだ麟祥院という寺院の間借りで、校舎もありませんでした。また学校運営にも資金が必要でした。その頃、知り合った勝海舟に哲学館の旨趣を説

明したところ、海舟はその志に大いに賛同して、多額の寄付を寄せてくれました。その上で、海舟は広く人びとから寄付を募るように、円了を励ましました。そこで円了は、学校建設と運営資金を得るために、各地で講演会を開いて、寄付を募ることにしました。

円了の回想によれば、明治二三年（一八九〇）「教育勅語」が出たことを機会に、「全国に向かって哲学館将来の目的たる東洋大学開設の旨趣を報道したいと思い、全国遊説に着手致した」と述べています。この頃には、哲学館を東洋大学にするという構想をもっていました。

円了は、後援者の資産家や政府の有力者との結びつきもありませんでしたから、一時に多額の資金援助を得ることができませんでした。また、それは円了の志すところでもありませんでした。普通の人びとの篤志により、学校を運営することが円了の目指すところでした。

二　最初の講演旅行

円了は、明治二三年から講演旅行を始めましたが、その記録を簡潔な日記にして、公表していました。円了は、十分な余裕のない人びとでも簡単に学べるようにと、講義を記録した『哲学館講義録』を発行していました。このなかに「館主巡回日記」として、旅行の要点を記事にしています。また哲学館を辞してからは、『南船北馬集』として刊行されました。記事は天気、移動、講演場所、面会者、寄付依頼者など簡単なものですが、これらにより講演旅行の様子を知ることができます。そこで最初の講演旅行のありさまを少し紹介しておくことにしましょう。

明治二三年（一八九〇）一一月二日朝九時に円了は新橋を列車で出発、大磯町に着き、教育会に出席して講話を行います。そのまま大磯に泊まり、四日一二時に大磯から静岡に到着して、県知事以下の挨拶回りを行いました。翌五日、県庁へ出向いて、また県知事・書記官・参事官・学務課長などに面会して、午後に師範学校で教育の将来の方針と哲学館拡張のことを演説しました。聴衆は県の役人、教員、生徒でした。その夜は、有志の依頼で市中の敬覚寺で学術講演を行いました。この日は市長にも面会したとあります。六日には、銀行頭取を訪問、七日は再び知事、書記官とあって寄付募集のことで相談し、さらに師範学校校長や有志に募集の依頼をして、汽車で焼津に向かいました。焼津の小川小学校で教育上の講演を行い、さらに掛川町へ着いて、その夜に同地の了源寺で仏教について演説をしました。八日はまた了源寺で仏教演説を行い、午後には教育会で教育について談話を行い、祝宴に参加した後、浜松へ向かいました。浜松では町長の隠宅へ泊めてもらいますが、同地の会合が町長の世話によるも

のだったためです。九日には、浜松の小学校で郡内の小学校教員にたいして教育上の談話を行い、午後は町内玄忠寺で演説会を二回実施しました。また懇親会も開かれ、郡長や国会議員、県会議員、代言人その他僧侶、紳士数一〇名が参加しました。

一一月一〇日、浜松を出て愛知県豊橋に入り、郡役所書記に迎えられ、町長などに会い、午後に真宗大谷派別院で二回講話を行いました。夜には懇親会に出ましたが、出席者は五〇余名にも及びました。一一日には、町長などに募金の件を頼んで、岡崎に向かい、岡崎町三河教校で午後に演説会を開き、夜は教育上の談話を行い、懇親会を開きますが、すべて学校内で済ましました。一二日は名古屋に入り、午後には県庁に行き、県知事などに挨拶を行い、翌日、大谷派別院で宗教上の講話を行い、正午には中学校で倫理上の談話、午後には特別教会臨時会で演説、夜は懇親会となりました。一四日には、各寺院などを訪問の後、午後から市役所議事堂で学術演説、その後、師範学校で哲学館拡張の演説を行い、翌日岐阜に行き、やはり大谷派別院で仏教

演説、師範学校で哲学館拡張の趣旨を説明します。一六日は朝岐阜を発って、名古屋に戻り午後に市役所議事堂で開かれた愛知県教育会の席上、教育上の演説を行い、市中鍋屋町の方園会で仏教講話を行いました。一七日は県庁で知事に会い、午後再び岐阜に行き、募金のことを依頼して廻りました。

一八日は、岐阜から滋賀県長浜へ至り、一九日は長浜、二〇日、二一日は彦根、二二日～二四日は大津から京都へ入ります。二五日、再び滋賀県に戻り安土村、五箇荘村、愛知川村を巡回して、一一月二八日に三重県一身田に行きました。一身田には真宗高田派の本山専修寺があり、二九日には法主などと面会して講演しました。円了の生家は真宗東本願寺の末寺でしたので、同じ真宗同士で親しい関係があったのです。翌日は津へ行き伊勢新聞社で講演、さらに一二月一日には県知事などに挨拶し、中学校で講演しました。二日には松阪、三日には山田（現伊勢市）へ行き、伊勢神宮を参拝、それぞれ講演を行い、四日には四日市、五日には桑名で講演を行いました。桑名教会

（仏教）の主催した中橋座での仏教演説には二〇〇〇余名の聴衆が集まったといいます。明治三五年（一九〇二）に富山県に講演旅行に行ったときのことですが、井波の別院で聴衆が幾千人ということになり、声がかれてしまって、ほとんど出なくなったと巡回日記に書いています。マイクのない時代ですので、多くの聴衆を相手に大声で講演しなければならず、苦労も一通りではなかったようです。

一二月六日には、再び愛知県へ入り、津島・熱田・大野（常滑市）・半田・西尾・蒲郡・豊川と巡回し、沼津へ出て、一五日に東京へ帰りました。

最初の静岡県と愛知県は少し詳しく説明し、その後の巡回は簡略にしましたが、ほぼ同様な日程で巡回しています。「館主巡回日記」のまとめでは、一一月二日より一二月一五日まで四四日で静岡、愛知、岐阜、滋賀、三重の五県の三〇カ所、懇親会の演説もいれると九九回の講演だったとしています。一日二・二五回の頻度で講演を行い、移動し、挨拶回りを行ったのですから、休む間もなかったことでしょう。

三　講演旅行の日数・地域・内容

円了は、明治二三年から講演旅行を始め、その後、海外旅行などの時以外は熱心に巡回を行いました。

これらの記録を集成して整理したものが表1です。若干漏れているものもありますが、明治二三年の一一月から始めて、その年は四四日。翌二四、二五年は一五三日、一五四日と年の半分近くを講演旅行で過ごしたことがわかります。その後、哲学館の充実などのために、旅行は減少したようですが、明治三二年頃からまた増加していきます。この間旅行が減少したのは、明治二九年（一八九六）一二月に蓬莱町にあった校

表1 井上円了の講演旅行

	場所場所	日数
明治 23	神奈川・静岡・愛知・滋賀・三重神	44
明治 24	静岡・滋賀・和歌山・徳島・高知・愛媛・香川・兵庫・鳥取・島根・山形	153
明治 25	兵庫・広島・山口・新潟・北海道	154
明治 26	福岡・熊本・佐賀・長崎・大分	39
明治 27		
明治 28		
明治 29		48
明治 30		16
明治 31		不明
明治 32		88
明治 33	石川・和歌山・三重	92
明治 34	三重・和歌山・富山	111
明治 35	兵庫・石川・福井	161
明治 36	(海外視察・哲学館事件)	
明治 37	山梨	17
明治 38	静岡・山口・佐賀・長崎・茨城	43
明治 39	奈良・京都・大阪・栃木・新潟・香川・長崎	173
明治 40	沖縄・鹿児島・宮崎・大分・北海道	275
明治 41	兵庫・福岡・大分・熊本・佐賀・京都	262
明治 42	兵庫・愛媛・島根・静岡・東京(大島など)・神奈川・埼玉・千葉	185
明治 43	愛知・三重・大阪・岡山・兵庫・鳥取・長野・岐阜・富山・福島・東京都(八丈島など)	226
明治 44	広島・岡山・(海外視察)	7
大正元	静岡・神奈川・奈良・和歌山・京都・茨城・栃木・千葉・埼玉・兵庫・福島	92
大正 2	埼玉・徳島・兵庫・広島・山口・神奈川	284
大正 3	滋賀・愛知・兵庫・新潟・茨城・福島	232
大正 4	岡山・秋田・長野・新潟・福井・栃木	197
大正 5	三重・岐阜・新潟・山形・愛知・岐阜・山口・京都	214
大正 6	愛知・大阪・京都・奈良・山梨・宮城・岩手・新潟・群馬・埼玉	221
大正 7	愛知・和歌山・青森・福島・栃木・東京	172
大正 8	静岡・秋田・青森・岩手	81

出典:『井上円了選集』12～15巻、三浦節夫「解説」(同、15巻)

舎が全焼してしまう事件があり、これを機会に、現在の白山キャンパスの場所に新校舎を建てることや、漢学専修科・仏教専修科の創設など校務に追われていたためと思われます。円了は、明治二九年正月に白山の地に東洋大学と東洋図書館を創設する計画を発表していましたので、哲学館の再建はその目標に沿って、進められることとなりました。

その後、明治三四、三五年(一九〇一、〇二)と講演旅行が積極的に行われました。円了は明治三五年一一月にインド・欧米視察に出かけ、翌年七月に帰国しましたが、旅行出発直後に哲学館事件が起きました。当初、円了は、事件が穏便に収まると思って旅行に出かけました。しかし文部省の厳しい処分に対応を迫られ、旅行途上で急遽帰国しました。円了はこの事件に、文部省が哲学館に倫理科の無試験検定免許を認めないなら、資格試験に受かるように学生をしっかり教育するという方針で臨みました。独立自活の精神が、学生にたいして教育方針として示されました。しかし時が経つ

と、学生も無試験検定免許の復活を望むようになり、板挟みになった円了は、明治三九年（一九〇六）に哲学館大学を辞すことになります（明治三六年八月に哲学館は専門学校令により大学として認可された）。

円了は、哲学館を辞してから、哲学堂に引退し、ここを拠点に修身教会運動に力を注ぐようになります。大学を辞してから、校務に縛られなくなった円了の講演旅行は、飛躍的に増加していきます。南半球一周旅行で国内講演の少なかった時もありますが、おおむね年間二〇〇日を越える日々を講演旅行に費やしました。通常の人物では考えられないほどの精力的な活動だったことがわかると思います。

円了の講演旅行は、全国に及びました。表1には講演を行った県を年次ごとにまとめて示してあります。最初は東海地域がはじまりで、四国、山陰と廻り、山陽、北海道、北九州と巡回しました。その後、北陸、沖縄と南九州を中心に廻り、東北に入るのは大正元年になってからでした。また東海地方は何度も巡回しています。円了の巡

回は、地方の寺院などとの縁で行われることが多く、浄土真宗の寺院の勢力の強かった東海地方はそれだけ、馴染みも多かったといえます。また浄土真宗の僧侶のなかには哲学館の卒業生も多かったのです。一方、東京近郊は比較的手薄になっています。円了は地方に哲学や修身の知識を広めたいと考えていたため、あまり中央にいなかったことがこうした結果となっていると思われます。

講演旅行は、地方からの要請に応じて行われました。『南船北馬集』に細かに記載があります。これにより明治四〇年～大正七年（一九〇七～一九一八）まで、講演の主催者、会場、講演内容の総数と比重を示しますと次のようになります。

①講演主催者（総数：二六八七名）

教育関係（二七％）・町村有志（一七・八％）・諸団体（一七・七％）・仏教関係者（一〇・二％）・組織連合（一一・一％）・自治体（一六・一％）

②会場（総数：二六八七会場）

寺院（三六・五％）・小学校（四五・九％）・他の学校（七・九％）・その他（九・七％）

③講演内容（総数：三八五七回）

詔勅修身（四〇・八％）・妖怪迷信（二三・六％）・哲学宗教（一五・四％）・教育（七・九％）・実業（六・八％）・雑題（五・四％）

講演主催者は、教育関係者が多く、これに町村有志が続きますが、明治四〇年代では仏教関係者も一定の比重を占めます。またその後、町村有志の比重が下がり、自治体が多くなります。ただ自治体では市町村長が代表として名前があがりますが、その後に僧侶や教育関係者・町村有力者の名前もありますので、実際は、これらの人びとが中心になり、自治体の長を名義上の主催者に担ぎあげたことも多かったと考えられます。円了の講演旅行では、郡役所の役人が世話のために同行したという記事もありますので、役所の方もかなり気を遣ったことがわかります。

また会場では、寺院と小学校が中心でしたが、大正頃から小学校が主流になりま

す。当時小学校が講堂などを整えて、地域の中核としての位置を占めるようになっていったのです。円了の記録にも、しばしば郡内一の立派な校舎だといった地元の自慢が記されています。地域の集会の場が、寺院から小学校へ比重を移す過程は、地域に近代社会が根ざしていく過程でもありました。その他は、豪農の屋敷や地方都市では演芸場などがあてられました。

講演内容では、詔勅修身が中心で、妖怪迷信と哲学宗教でだいたいを占めています。この比重は、時期的にはそれほど変わりませんが、大正期には妖怪迷信や哲学宗教の比重が若干増しているようです。人びとの間に、少しずつ迷信打破や学問への興味が広がっていたことがあったのでしょう。

四　講演旅行の規則と修身教会・国民道徳普及会

講演旅行がどのように組織されたかは、よくわかってはいませんが、明治三二年（一八九九）に哲学館事務所が定めた「館主巡回及招聘心得」では、次のようになっています。

①有志の依頼に応じて学術演説・講義を行う。
②演説・講義の時間は二時間以内とする。
③演説・講義への謝儀は哲学館の基本金とする。
④滞在費はなるべく地方の負担を希望する。

⑤館主は諸事倹約主義であるので、供応・接待などは謝絶する。
⑥やむなく懇親会開会の場合は茶菓のみとする。
⑦巡回はたいてい同伴者一名とし、巡回中午前は次の地方への移動時間とし、午後は演説・講義の時間、夜は揮毫の時間とする。
⑧巡回の日程は各地調整の上、一週間前に通知する。
⑨今回から新築費募集について支援者・協力者に希望に応じて記念として揮毫を贈呈する。

哲学館主時代のものですが、大学を辞しても、おおむねこれに準じていたようです。円了は全国講演旅行を始めるときに、禁酒・禁煙に、断筆を加えて揮毫しない方針でした。禁酒・禁煙は自戒のためと、接待により余計な負担を懸けるのを嫌ったためと思われます。若い頃の円了は酒は強かったようです。酒も煙草も一時は三度の飯より好きでしたが、学校が成功するまで禁酒・禁煙し、玄関にも名刺にも「禁酒禁煙

諸事倹約」と記していたといいます。断筆もしたので、三禁居士と自称していました。円了は、大変きまじめで、あまり冗談も言わない人だったのですが、何か旅行地の七不思議を造ってみたり、ネーミングをしたりすることが好きで、余り上手いとは言えそうもないことを書き上げて、楽しんでいました。

断筆は、この規則では解禁されました。それはこれまで貢献のあった人びとに、勝海舟に頼んで揮毫してもらい、贈っていました。勝海舟も哲学館の応援になるならばと、「陰ながらの筆奉公」と称して、喜んでこれに応じていましたが、この年亡くなってしまったので、自ら揮毫することにしたのでした。この規則では、二禁にしたのですが、その後、二禁もやめて、三勤になったといいます。

三禁をやめてしばらくして、円了の体調を気遣った卒業生が円了にお控えになったらと奨めたことがありました。円了は、山奥の田舎の馬車も通っていないところまで、教育勅語の教えを徹底しようとすれば、車にも乗れない、馬にも乗れない、旅宿

もなし、食事も小言を言えません。まずたいていは小学校で話をして、そのままそこで寝泊まりし、時には教室のテーブルを並べて、その上に寝るようなこともあり、食事などもお話にならないありさまです。その間に村長、校長などより地方の人情・風俗をありのまま聞き取るためには、それらの衣食住に不足がましいことを言うどころではありません。進んでドブロク一杯も共にし、彼らの飲む手製のタバコも飲まなければならないのです。こうして初めて漫遊の目的を達することができるのですと説明したそうです。人びとの間に親しく交わって、教えを説いた円了らしい姿勢が示されています。

円了は、哲学館事件でイギリスから帰国した直後の、明治三六年（一九〇三）九月に「修身教会設立旨趣」を発表し、修身教会運動を呼びかけました。そして哲学館大学を辞した後は、哲学堂に引退して、この運動のために全国を巡回することになりました。円了の講演旅行の目的がここにまとめられていますので、その内容を少し説明し

ておくことにしましょう。

円了は、国内の講演旅行で各地を見聞し、宗教がふるわないために徳義が衰えていると指摘します。これを挽回するために各地に修身教会を設立して、生涯教育としてこれに取り組みたいとしています。円了は欧米の視察の経験から、両者の貧富の差は国民の道義徳行の差によっていると感じていました。それなのに国民一般の修身教育はせいぜい小学校までで社会教育の部分がなく、文明国としては嘆かわしいと述べています。そこで欧米の日曜教会にならって、寺院教会を設けて、教育界と宗教界が協力してその運営にあたる修身教会を設立したいというのでした。

教会組織の考え方は、国民に道徳を知らしめることを目的とし、各町村の協議により自治的に設立運営されるものと提案しています。また日曜隔週程度で集会を持ち、僧侶・教員が出席して講話をし、会長は町村長ないし名望家をあてるとしています。さらに会は、音楽を唱和し、教育勅語を奉読、僧侶・教員の講話などの順で行うとよ

いとしています。また教会での結婚式などを提案しています。さらに図書館を設けて、新聞や雑誌、書籍をおいて教化を行うのもよいとしています。組織は本部を中央において統括するのではなく、各自が自主的に活動し、『修身教会雑誌』を出して相互の連絡をとるのみとするとしています。円了は一人一会主義で、組織の力によりかかるのではなく、それぞれが自らの責任で行動することを大切にしましたので、中央集権型の組織を構想することはありませんでした。

修身教会の精神ですが、円了は大事なのは、よく身を修め、家をととのえ、社会・国家を富強に導くことで、倹約・勉強・忍耐・誠実・信義・博愛・自由などの徳目がみなこのなかにはいると説明しています。円了は、「官々となる金石の声よりも、民々と呼ぶ蝉そこひしき」などと、たわむれに書をかいたほどで、官権を頼みにはしない人でした。民を大事にする民本主義的精神の持ち主でした。したがって教育勅語の精神といっても、上から押しつけられる硬直した教義のような理解はしていなかっ

たのです。通俗的なものですが、近代社会に必要な自己規律を人びとが内心の道徳として高めるようになることが、円了の希望するところだったと理解できるでしょう。独立自活の精神がまさにこれに当たります。

大正元年になって、修身教会は国民道徳普及会に組織変更となりました。ここでは会員も支部も設けなくなりましたので、円了の個人事務所といったものに変わりました。そこで講演の演題についてリストが示されているので、紹介しておきましょう。

甲類……国民道徳大綱、教育勅語大意、戊申詔書大意、忠孝為本説、国体精華の説明、公益世務の解釈、義勇奉公談、世界人文の大勢、国運発展の道、戦捷の結果と戦後の経営、勤倹治産論、自彊不息説、実業新興策、公徳育成法、社会教育一斑、家庭教育談、精神収用法、風俗矯正法、青年の心得、婦人の心得

乙類……教育と宗教との関係、倫理と宗教との異同、哲学と宗教との別、知識と信仰の別、仏教の人生観、安心立命談、仏教の将来、霊魂不滅論、未来有無説、迷信論、妖怪総論、心理的妖怪、幽霊談、西洋最近の実況、海外移民の近状、南米視察談、豪州及び南阿旅行談、印度内地旅行談、日本風俗と欧米風俗との相違

甲類は主として、道徳・社会教育にかかわるもの、乙類は宗教・哲学・妖怪・旅行談といったものです。講演依頼者はこのリストから希望するものを選んで、依頼することができるように配慮したものです。

五　旅行道具と旅の様子

円了の旅は、だいたい長期にわたるものでしたが、それにもかかわらず、所持品は簡素なものでした。まったく身の回りのことは気にしなかったようです。インドのカルカッタで円了を出迎えた人の思い出話では、円了は少しも着飾ることがなく、ほとんど着の身着のままで、ろくに着替えももたず、簡単な手荷物一、二箇ぐらいで海外を大旅行していたと伝えています。宿所もいっこうに気にする風がなかったようです。もっともその記念写真が残っていますが、これではキチンと背広、チョッキにネクタイを締めて、イギリス風の紳士のスタイルをしています。これが円了の一張羅

だったのでしょうか。

他の教え子の話では、円了は大変倹約家で、国内旅行では汽車はたいてい三等車で、弁当はお握りでした。また見送り出迎えはよろこばなかったといっています。ちょっとした旅行でも、多くの見送りを集めて、勢力を顕示するようなことは嫌っていたのでした。

円了の鞄は有名なもので、縦二尺位の薮医者のもつようなもので、何十年と同じものを使用していました。なかには筆・紙・墨池・手帳・切手・羊羹といった円了の七つ道具というようなものがあり、授業の五分間休み、汽車の待合の間など寸暇であってもこれを取り出して、手紙の返事、雑誌の原稿、巡回の日記などを書いていたそうです。

現在、大学には円了が旅行に使ったカバンが残されています。写真に紹介しておきます。カバンは、革製で手提げのところがとれてしまった使い古したものです。幅二

「妖怪道人円了」の印

「猛虎一声」の筆

旅行カバンと携帯品

二センチ、長さ四四・五センチ、高さ二四・三センチの小さなカバンです。曲尺だと一尺三〇センチ強ですので、二尺というとこのカバンより少し長かったようですが、ほぼこのようなカバンを携帯していたといえるでしょう。ほかに山高帽があります。またカバンの中身ですが、タバコ入れ、硯、竹製のパイプ、筆立てなどがありました。筆立てはどくろの形と牙の形をしたもので、妖怪博士らしい意匠となっています。

ほかに「旅行必携」などと題したメモ帳を持ち歩いていたようです。これは講演に使う材料をメモしたもので、これを講演の前に見て準備をしたのでしょう。世界の紹介にかかわるものでは、エッフェル塔の高さとか、インドの人口といったものがメモされています。

さらに別に揮毫に使ったとされる筆と書に捺した印章が残っています。筆は長さ三四・九センチ、太さ三センチほどのもので、「猛虎一声」という銘があります。銘の

下には「広島県賀茂郡川尻村　北川新三郎謹製」とあり、この人物が銘を付けて販売したものだったことがわかります。広島県では熊野筆がありますが、その近くの川尻筆も高級品の産地として知られていました。明治末年から昭和頃までが最盛期だったといいます。銘は中国宋代の詩の一節で、「猛虎一声して　山月高し」とあり、「遠くで猛虎の一声する声が聞こえ、山には高くさえた月がのぼっている」というほどの情景を詠ったものです。孤高の詩興があり、よく書画にも表されていました。三菱財閥を起こした岩崎弥太郎が好んで揮毫していたといいます。孤軍奮闘という岩崎の心境をうかがうことができます。円了もそうしたところが気に入ったのでしょうか。

この筆は円了の没後、遺族から親しかった京北中学校校長へ贈られたもので、講演旅行の時に使ったものだという由来書が付けられています。筆先がいかにも使い込んだようになっていて、自由闊達な円了の書にふさわしいようすが窺われます。印章はいくつもありますが、「無官無位非僧非俗　妖怪道人円了」というのが、円了の人となりを示して著名です。

円了が講演でどんな話をしたのかは、直接の記録ではないのですが、講話集や談話のような漫録などが多く残っていますので、おそらくそうした話をしたのだと考えられます。円了は、習慣の大切さを説いたなかで、自分は講演は五〇分と決めて行っているので、時計を見なくても時間がわかるといっています。また講演中は、水や湯は飲まないように習慣づけているので、とくに飲みたくなるようなことはないとも説明しています。ここから円了の講演は一回、五〇分だったことがわかります。マイクもなく、聴衆の座席も楽なものはなかった当時の環境では、ちょうど手頃な時間だったのでしょう。

円了が亡くなった後に、記念集が創られましたが、このなかに講演旅行の様子を示す思い出話が残っていますので紹介しましょう。

丁度暑い真夏八月頃、井上先生は学校夏中休暇を利用して地方巡回講演に出て

私の村へもやってこられた。村では大騒ぎで、大学者を迎えて講演を聴こうというので村としては最善の方法を講じて歓迎した。先生の講演会場は小学校で、宿は私の寺であった。講演は教育勅語に関するお話と例の妖怪学説とであった。講演を終わって私の寺へ帰られた先生はビールの盃を重ねながらいろいろ面白い天狗のお話などを聞かせて下さった。当時のことで今なお私の忘れないのは、何でも先生は日本酒は絶対禁酒であるが、ビールという西洋の酒なら飲まれるそうだと誰か郡役所で聞いてきた。ところがビールは私のむらにはない。大騒ぎして一里ばかり隔たった町から買ってきたものである。そのビールを先生は一本と少しばかり飲まれた。然るにあまったビールの始末に困ってまず養父が少し飲んでみて、こんな苦いものは飲めないと吐き出す。私はビールの名くらいは聞いていたので、何でも美味いはずであると、少し注いで貰って飲んだところがまったく苦いので驚いた。こんなもの美味いといって飲む人の気が知れなかった。夕飯を終

えられた先生は詩作に耽っていたが、こんな詩ができたと養父に示された。それから夜は地方有志の依頼に応じて数十枚の書を認められた。その後、養父は学者の話が出れば必ず井上先生のことをいう。こうして学徳兼備の先生を推讃することを自己の有する名誉の一つに数えていたのである。

これは『館主巡回日記』によれば、明治三五年の夏のことで、場所は福井県鯖江市の郊外にある小坂という村へ行ったときのことです。七月一九日に小坂の小学校で講演して、同地の明正寺へ宿泊しています。東京から立派な学者がやってくるというので、歓迎した様子が伝わってきます。

講演の方も重要ですが、ほんの一握りしかいなかった東京大学の卒業者で、博士の学位をもった人物がやってきて講演をするというと、地方ではそれだけで大変な受け止め方をされた時代でした。娯楽も少ない時代でしたから、お祭り見物の気分で多くの人が集まったのでした。そうした人物がビールという新しい都会の生活様式を持ち

込んだときの村の驚きがここには表されています。それでもビールは鯖江の町にはもうあって、探せば買うことができました。新しい文化生活が江戸時代からの伝統的な生活のなかにいた村にも次第に入り始めていたのです。多くの地方の人びとが円了を歓迎して、その話を聞こうとしたのは、工業化とともに進んでくる新しい文化を吸収したいという思いからだったのでしょう。円了はこれに応えながら、人びとを近代的な社会の担い手へと導こうとしたといえるでしょう。

六　おわりに

円了の講演旅行は、本格的には明治二三年（一八九〇）から、その死の大正八年（一九一九）六月まで、その時々の多少はありましたが、絶え間なくつづけられました。明治三九年（一九〇六）から大正七年までの分だけでも講演数五二九一回、聴衆一三〇万六八九五名であったと報告されています。大変な日数をかけ、鉄道のないところでは馬車や人力車を用い、それも使えないときは自ら歩いて峠を越えて講演旅行を行いました。

この間、日本は近代化が進み、鉄道網が形成され、都会の文化が地域にも浸透し始

めていました。中央では大学が出来、西洋式の教育が行われ、その教育を受けた人びとが、地方に帰り、教員や役人として活躍し始めました。こうした人びとを通じて、近代的な生活様式が地方にも広がります。江戸時代から中央への遊学と交流は始まっていましたが、明治維新後この傾向はますます強くなります。円了は東京では哲学館と大学を創設して、地方から出てくる若者に学ぶ機会を与え、自らは地方に出かけていって、講演によって人びとを新時代にふさわしいものに導こうとしました。熱心な聴衆に恵まれることもあれば、ほとんど聴衆がなく、柱に向かって語ったということもありました。また共感をもって聞いてもらえるときもあれば、まったく興味本位ということもありました。哲学を学ぶというと鉄学と取り違えて、鉄道の技師にでもなるのかといわれるような時代のことです。しかし地域には、円了を評価できる人たちが少数ながらいて、彼らが円了を迎え、多くの聴衆を集めて講演会を開いたのです。明治末期からは哲学館卒業者が地方にいて、円了を迎えたり、この機会に同窓会など

を開きました。こうして中央と地方の交流が行われ、地方も少しずつ近代社会の内容を整えていったのでした。

地方社会の近代化のなかで、円了はこれを担う人材を育てようとして、講演旅行を精力的に行ったのでした。円了の目指したものは、新しい近代社会の担い手として、独立自活の人材を育成するということであったと思われます。円了があげた徳目は、通俗的なものでかならずしも目新しいものではありませんが、それでも江戸時代から出てきたばかりの人びとを近代社会へ導くには必要なものでした。また一朝一夕に普及するものでもなかったのです。円了は、ほんとうの意味での国民が成長することを望んでいました。もちろん円了にはもう一つの側面があります。それが宇宙主義という普遍主義でした。現在の言い方なら世界市民主義とでもいえばよいでしょうか。そのことは別のところでふれられるので、ここではこれ以上論じないことにします。

主要参考文献

『井上円了選集』第一二巻～第一五巻、第二五巻
田中菊次郎「円了と民衆」（『井上円了研究』一）
『井上円了センター年報』第四号、第五号
三浦節夫「解説―井上円了の全国巡講」（『井上円了選集』第一五巻）
『存在の謎に挑む　哲学者井上円了』東洋大学附属図書館、二〇一二年
三輪誠一編『井上円了先生』（東洋大学校友会、一九一九年、後に『伝記叢書』一二五、大空社、一九九三年に収録）
中川理吉編『学祖円了先生略伝・語録』（京北学園、一九四七年）

東洋大学史ブックレット7

井上円了の全国巡講 ―旅する創立者　国内編―

二〇一四年三月二〇日　発行

編　集
東洋大学井上円了記念学術センター

著者
白川部達夫（東洋大学文学部教授）

発行
学校法人東洋大学
東京都文京区白山五―二八―二〇　〒一一二―八六〇六

印刷所
株式会社フクイン

東洋大学